

熊本市『災害に強いまちづくりに関する調査』報告

2021年9月に熊本市民の皆さまを対象に実施した『災害に強いまちづくりに関する調査』の主要部分の集計結果を報告します。住民基本台帳から無作為に抽出した2000人の市民(20～70歳)の方々に郵送法で調査票をお送りし、697の有効票を返送いただきました(回収率34.9%)。ご協力頂いた方々に記して感謝申し上げます。

この調査は科学研究費補助金 基盤研究(C)(1)「災害レジリエンスに資する社会関係資本メカニズムの研究」(20K02111)の補助を受けた研究の一環です。

2022年3月1日

九州大学大学院比較社会文化研究院

三隅一人

● I 地域のこと =====

◎質問:「あなたのお宅では、ご近所の人たちと、以下にあげるおつきあいをどの程度されていますか。」(図1)

ご近所の交流についてお尋ねしました。「立ち話」や「もののやりとり」はかなりされていますが、より深い交流になると「しない」方が多勢になります。それでも1～2割の方は活発に交流されているようです。「する」4点～「しない」1点として5項目を合計して算出する近所づきあいスコアは、平均8.6です。

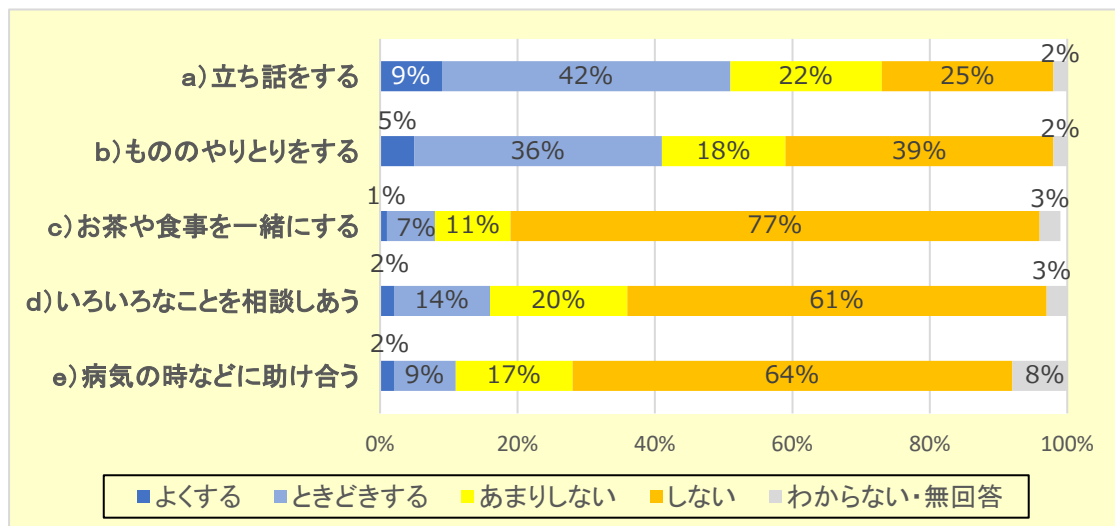


図1 近所づきあいの程度

◎質問:「あなたの友人(家族・親戚を除く)の中で、年に数回は会食をしたり一緒に余暇を楽しむような親しい人は、何人くらいおられますか。」(図2)

親しい友人数は、5人以上の方が3割いる一方で、「いない」という方も少なくありません。近所づきあいスコアと親しい友人数の相関(ピアソン相関係数)は0.13(1%有意)と、さほど大きくありませんので、友人関係は近隣を越えて広がっていることがわかります。

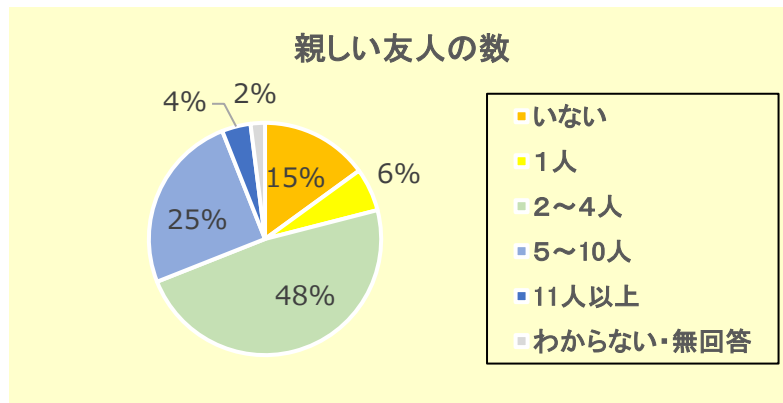


図2 親しい友人の数

近所づきあいと親しい友人の状況は、年齢や居住形態によって異なります。図3に、年齢別、居住形態別で、近所づきあいスコア（得点）と親しい友人数（人数）の平均値を比較しました。近所づきあいは60代や戸建て住宅で活発です。20代では近所づきあいが少なく、逆に親しい友人が多いです。賃貸集合住宅では、近所づきあいも親しい友人数も少ないです。賃貸集合住宅では熊本市内の通算居住年数10年未満が33%と移動者が多いので、そのことも影響していると思われます。

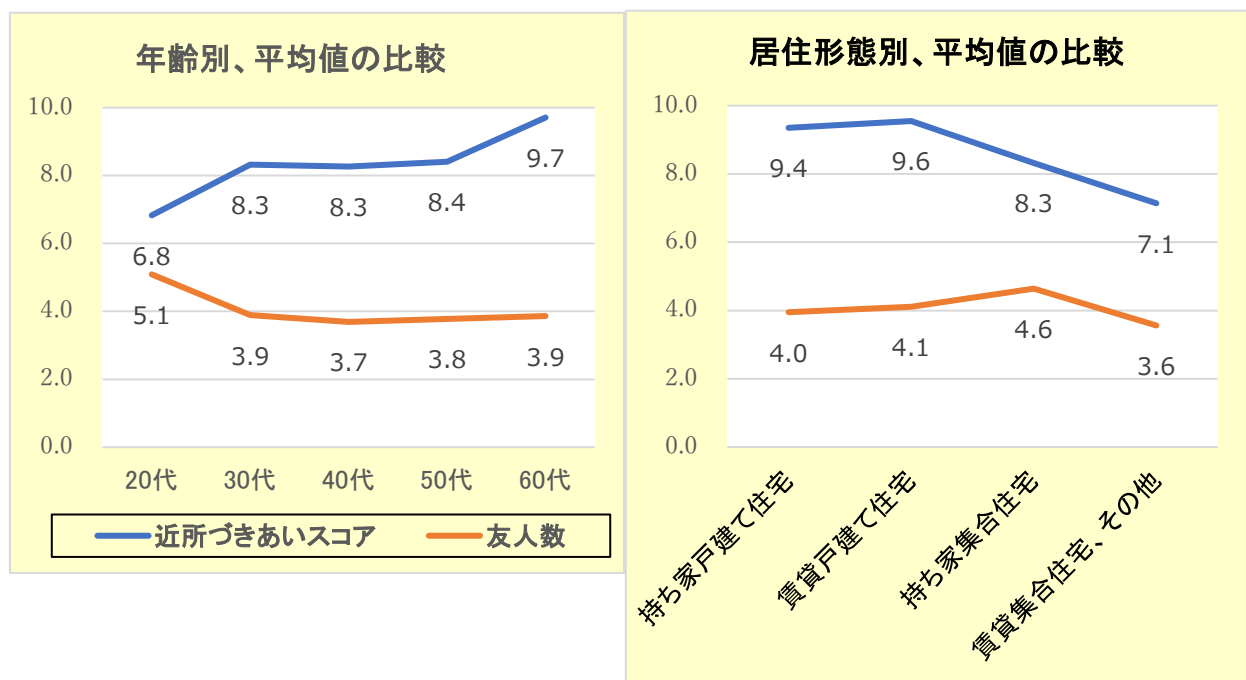


図3 年齢別と居住形態別にみた近所づきあいスコアと親しい友人数

◎質問：「以下にあげる団体やグループについて、ここ数年の間にあなたがその集まりや活動に参加したものがありましたら、いくつでもお教えてください。」（図4-1、図4-2）

さまざまな団体への参加を、参加率が高いものから示しました（回答者数に対するパーセント）。「自治会、町内会」の加入率はずっと高いと思いますが、今回は参加を聞いていますので3割にとどまりました。「趣味やスポーツ」の参加が28%と活発です。一方、「いずれにも参加していない」も3割に及びます。

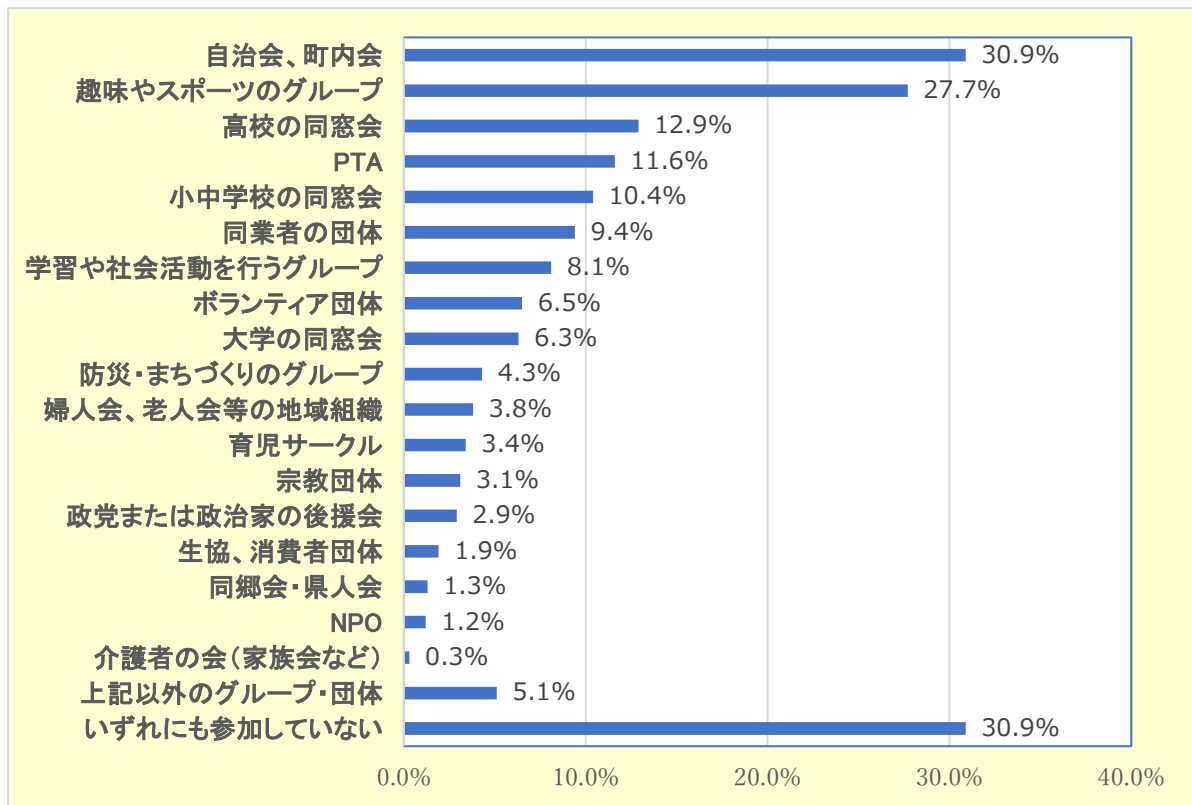


図 4-1 団体参加

参加している団体の種類の数は平均 1.5 種類、4 種類以上という活発層も 1 割います。年齢別で見ると、60 代が平均 1.9 種類と多いのに対して、20～30 代が少なくなります。性別や就業状況（無職／自営／非正規雇用／正規雇用）で大きな差はありません。

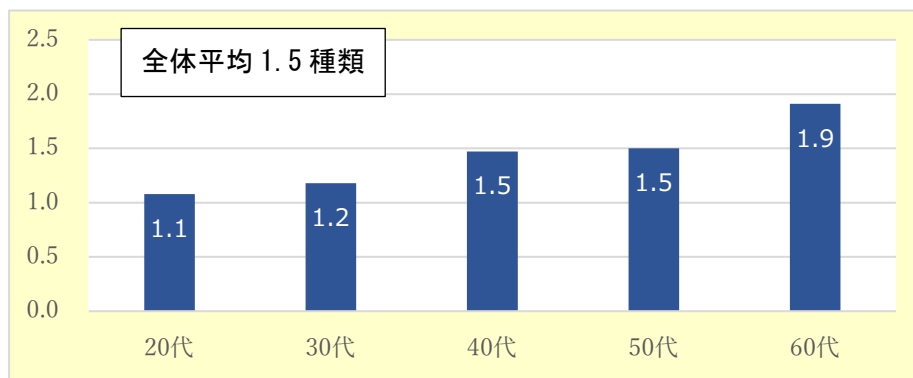


図 4-2 年齢別、参加している団体の種類数

◎質問：「あなたはふだん、以下にあげる活動をどの程度されていますか。」(図 5-1～図 5-4)

さまざまな地域活動、社会活動、市民活動、政治活動をどの程度されているかをうかがいました。「いつもしている」5 点～「したことがない」1 点として 8 項目を合計して、社会活動スコアを算出しました。全体平均は 16.9 ポイントで、年齢別で見ると、団体参加と同様に年齢が高いほど得点が高いです。グラフは示しませんが、就業形態（正規雇用／非正規雇用／自営／無職）別で有意な得点差はなく、職業では事務職・専門職の得点が有意に高いです。

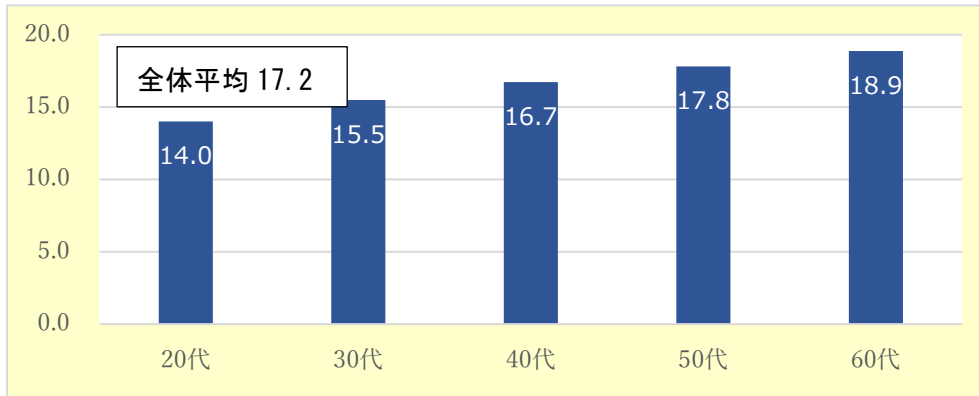


図 5-2 年齢別、社会活動スコア

個別にみていきましょう。地域活動では、程度に関わらず「している」回答は、「町内の行事や祭りの運営」は20%ですが、「地域の防災・まちづくり活動」はやや低く13%です。

政治活動では、程度に関わらず「している」回答は、「国政選挙や自治体選挙の投票」は68%と高いですが、「政治活動や選挙運動の支援」は12%に止まります。

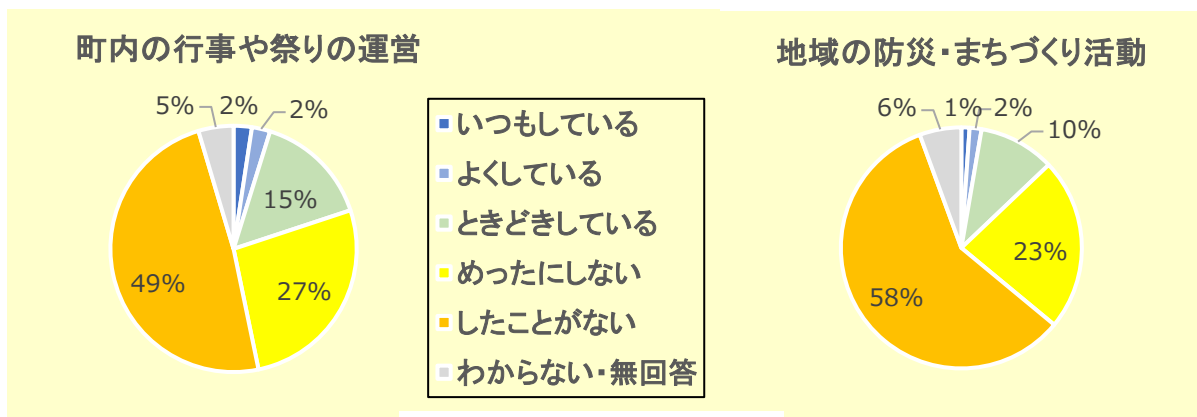


図 5-1 地域活動参加

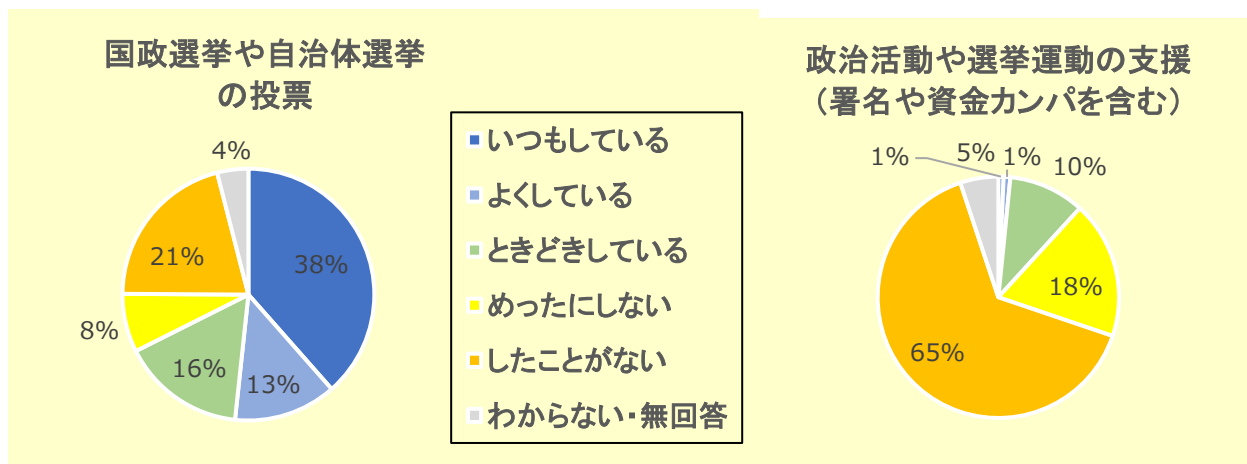


図 5-2 政治活動参加

社会活動、市民活動では、程度に関わらず「している」回答は、「募金、義援金、献血」51%、「困っている人への声かけや手助け」41%が高く、「ボランティア活動」19%、「同窓会や同郷会などの世話役」14%と続きます。「市民運動への参加」は2%に止まります。

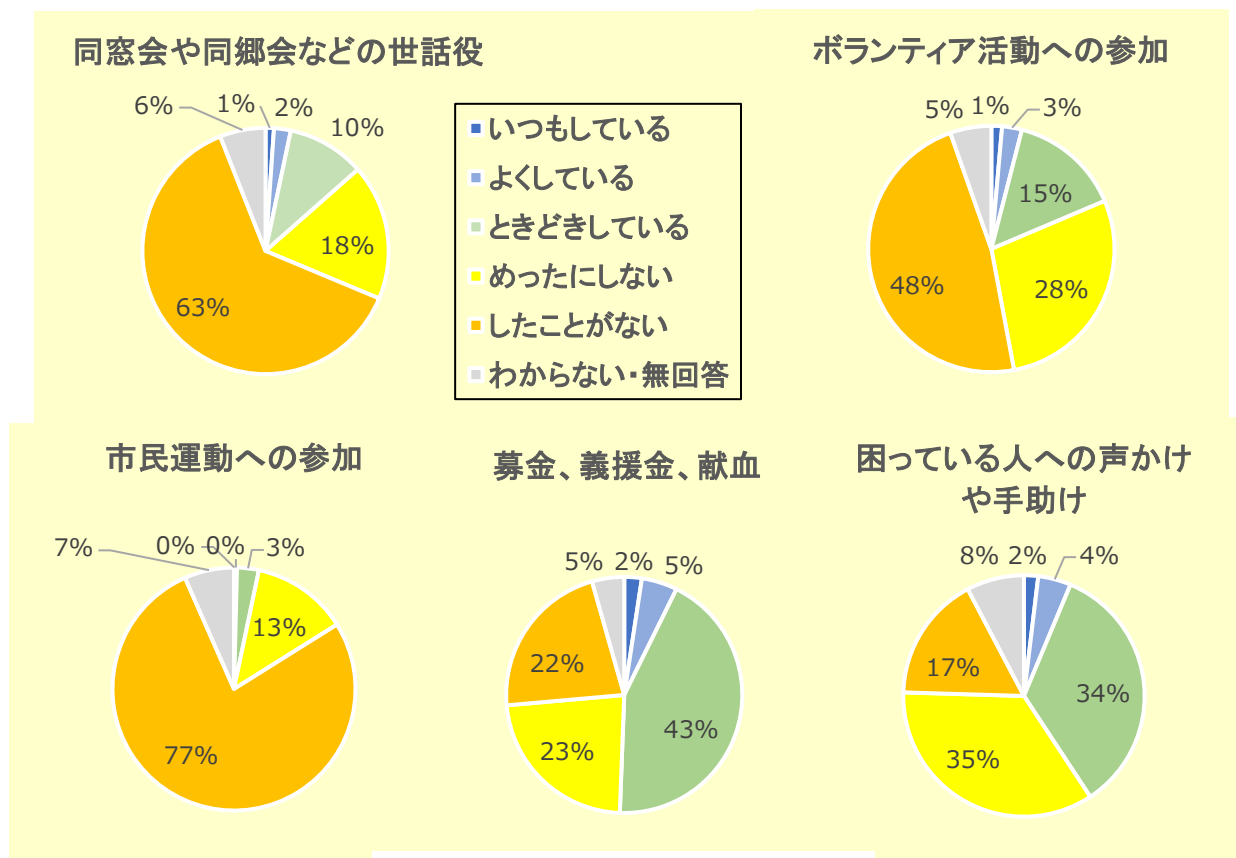


図 5-3 社会活動、市民活動参加

◎質問：「あなたがお住まいの地域について、以下にあげることをどう思われますか。」（図 6-1～図 6-4）

地域生活についてのお考えうかがいました。まず、地域の評価について、程度を問わず肯定的な評価は、「地域は安心して暮らせる」は 90%、「できれば今の地域にずっと住んでいたい」（永住意志）も 74%と高率です。今回調査では、熊本市での通算居住年数が 20 年以上の方が 69%を占めており、その方々の永住意思は 85%に及びます。

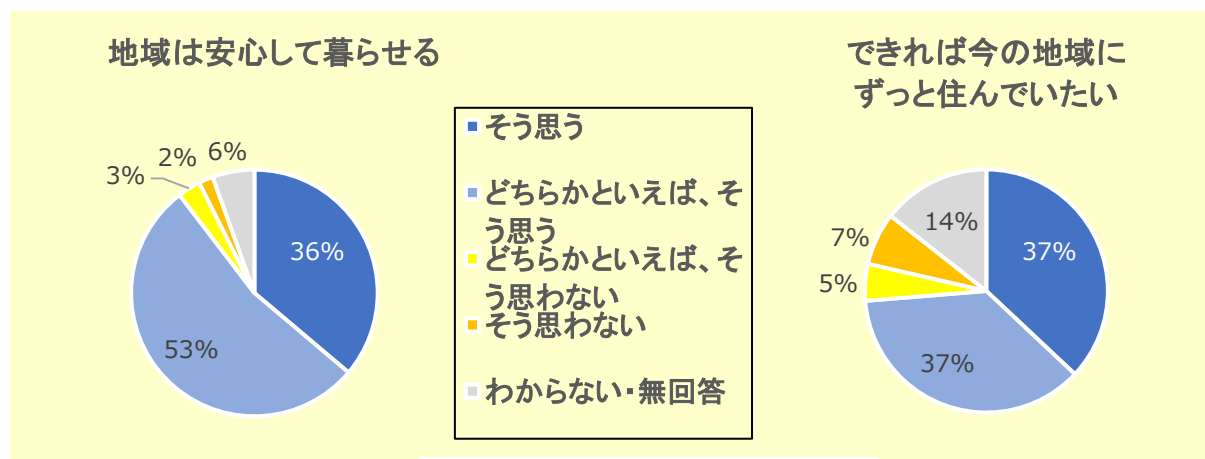


図 6-1 地域の評価

地域運営の評価について、程度を問わず肯定的なご意見は、「地域では皆が助け合っている」は

46%、「信頼できる地域リーダーがいる」は 33%です。一方で「わからない」という回答が多くを占めます。そこで前述の団体参加を、「自治会、町内会」「婦人会、老人会等の地域組織」「防災・まちづくりのグループ」の3つの地域団体を含めて参加<あり>のグループ、それら以外の団体ならば参加<あり>のグループ、そして、団体参加まったく<なし>の3グループに分けてみますと、やはり団体参加がない方や地域団体参加のない方に、「わからない」回答が多いようです。この3グループでは肯定的評価の比率も大きく異なります。

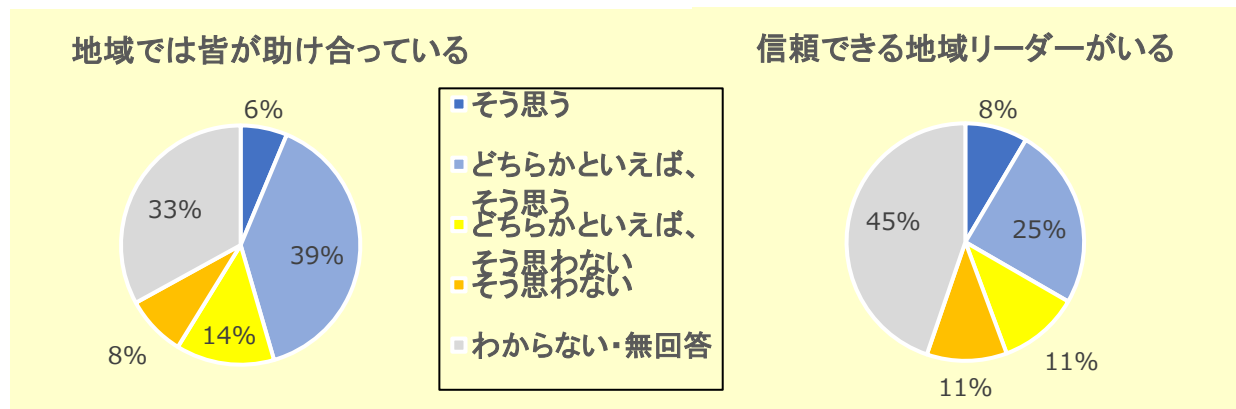


図 6-2 地域運営の評価

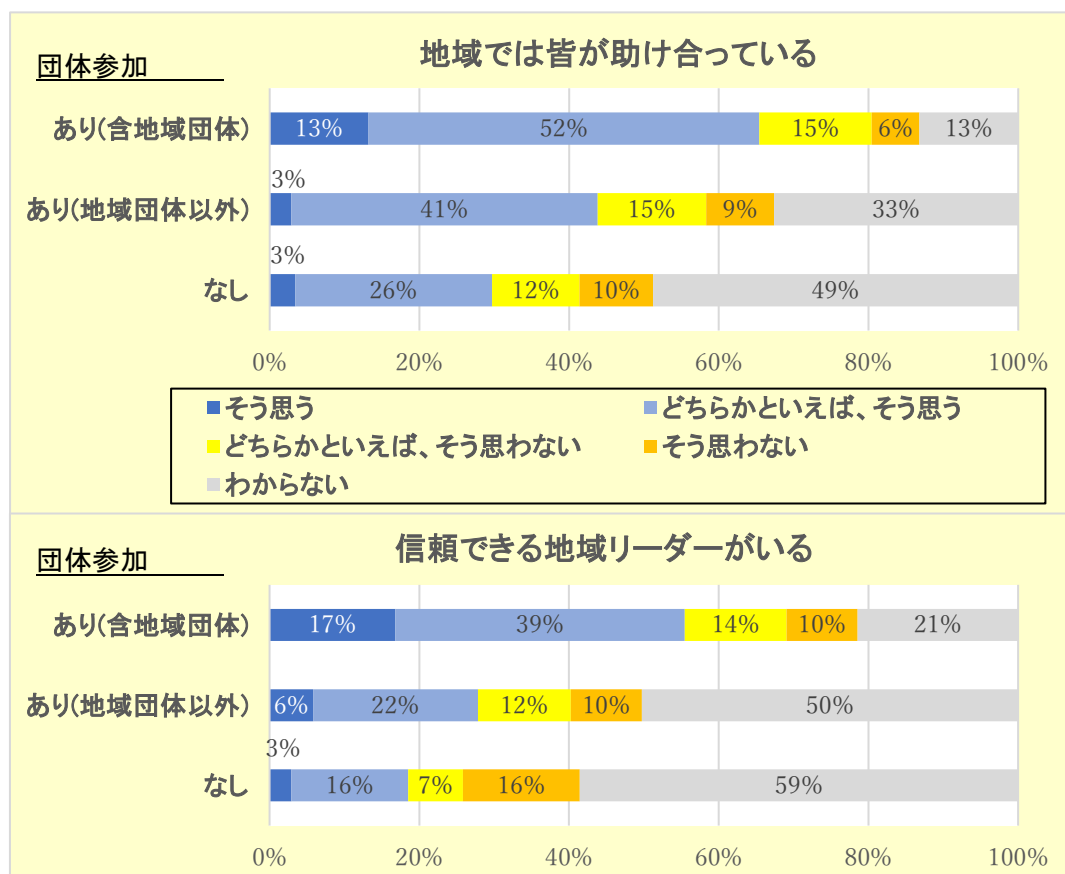


図 6-3 団体参加の有無と地域運営の評価

地域生活での負担感については、「地域の役回りや行事が負担に感じられる」では 45%、「近所づきあい問わずらわしく感じられる」では 69%が、程度を問わず「そう思わない」という回答です。

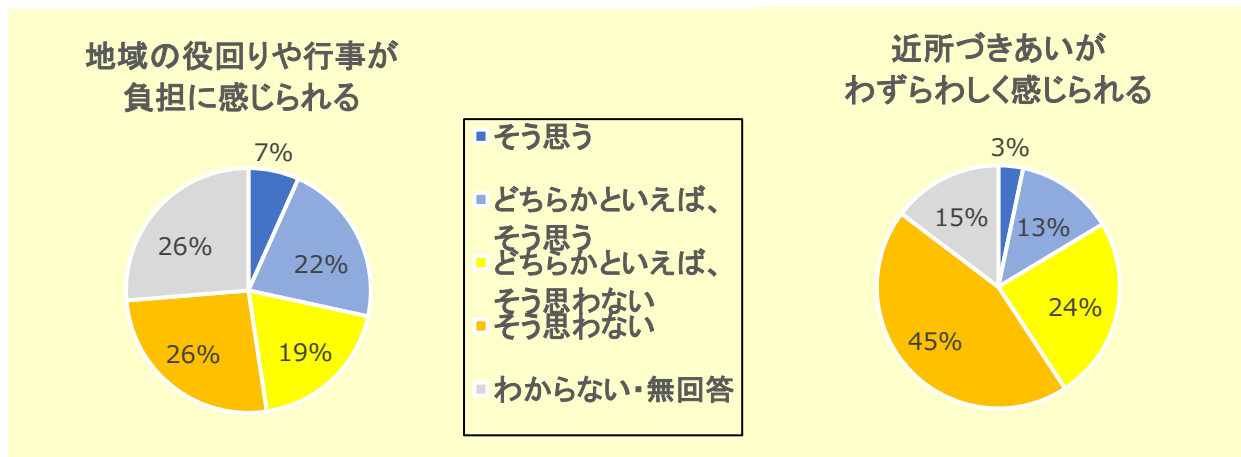


図 6-4 地域生活の負担感

● II 熊本地震のこと

2016年熊本地震のことをうかがいました。今回（2021年9月）の調査で回答いただいた697人のうち、この地震を経験された方は653人（94%）です。以下の集計結果は、とくに断りがない場合はその653人の回答の集計値です。

◎質問：「災害発生時の、あなたのお宅での被災の状況をお教えてください。」（図7）

被災の状況をうかがいました。以下の集計で被災状況と他の質問との関係をみるときは、「家屋が全壊ないし半壊」を「被害大」、「家屋が大きく損傷するほどではなかった」を「被害中」、「被害はほとんどなかった」を「被害小」としてまとめます。

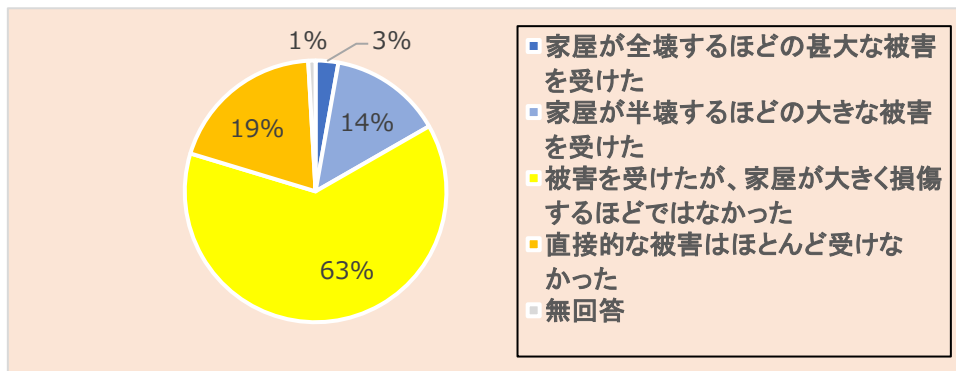


図 7 熊本地震被災の状況

◎質問：「あなたは被災時に、自宅を離れて避難所等に避難しましたか。」（図8）

◎質問：「どれくらいの期間、避難生活をされましたか。日数をご記入ください。」（図9）

避難したか否か、また、避難した方に非難した期間をうかがいました。避難したか否かは、ちょうど半々です。非難日数は50%が5日以内、75%が11日未満です。一方、二ヶ月（60日）以上の方が4%おられます。

図8に、被災状況別に避難したか否かをみました。「被害大」でも42%は避難所等への避難をされていません。一方、「被害小」でも35%が避難されています。図9で被災状況別に避難日数をみますと、「被害大」では11日以上長期避難が43%を占めています。余震が激しかったこともあって、長期避難は「被害小」でも9%を占めます。

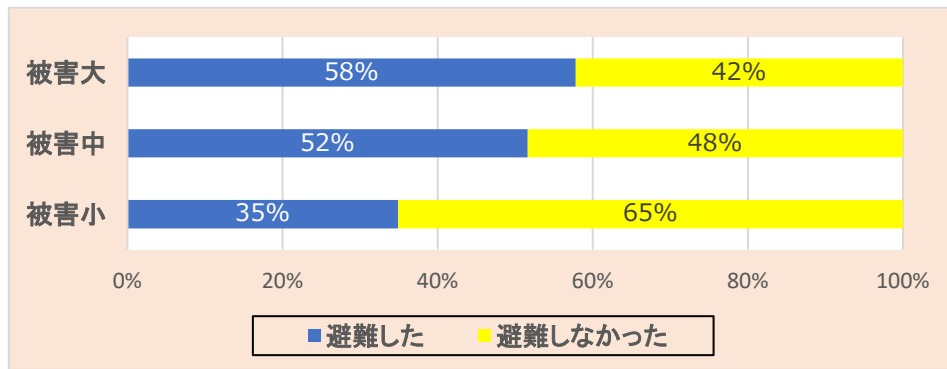


図8 被災状況と避難行動

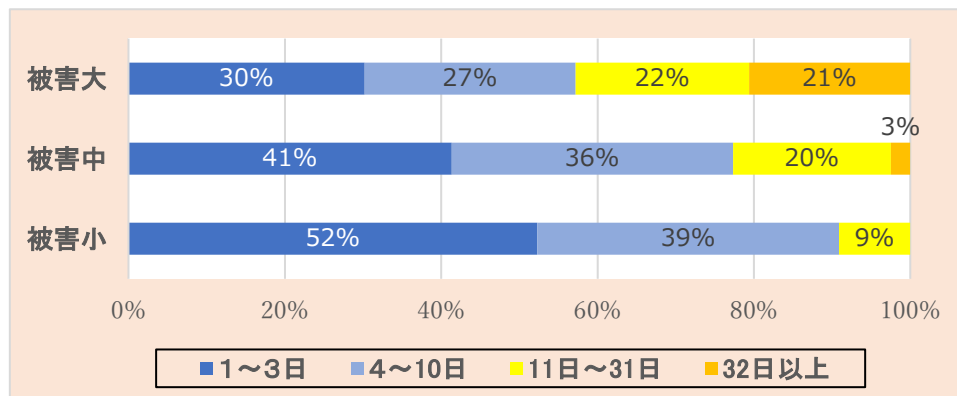


図9 被災状況と避難日数

◎質問：「避難の状況は、以下のどれに当てはまりますか。」(図10)

避難した方々に、避難先をうかがいました。最初から指定避難所に避難した方は36%にとどまり、指定避難所以外の諸施設が23%あります。個人宅や車中泊が合わせて37%あり、避難所に頼らない避難行動も多くとられています。

グラフには示しませんが、被災状況との関連では、「被害大」で指定避難所以外の諸施設が29%とやや高いです。指定避難所は、「被害大」31%、「被害中」37%、「被害小」39%と、むしろ被害が軽い方が利用率が高いです。

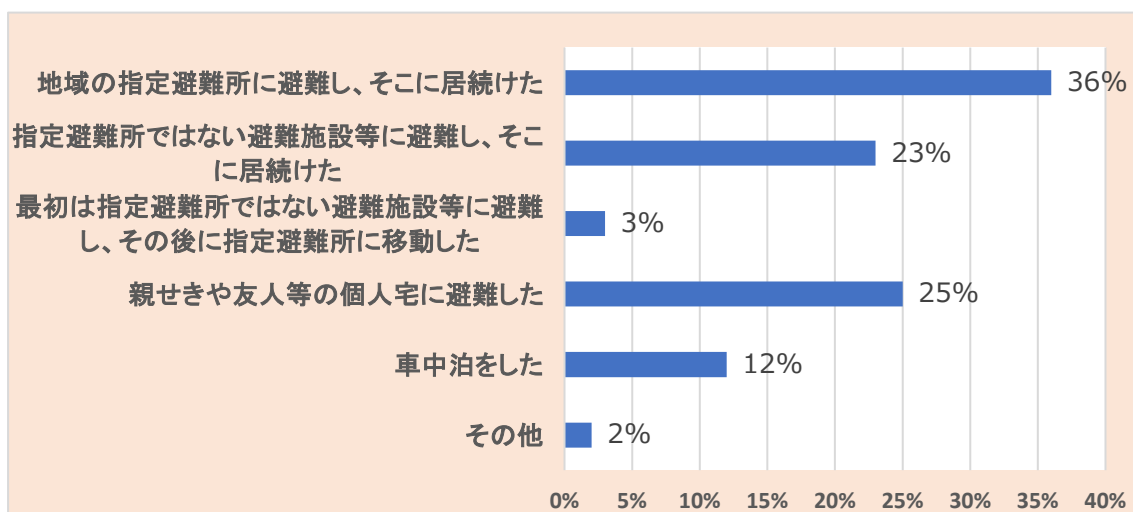


図10 避難先の状況

◎質問：「あなたは、避難中に車中泊をされましたか。」（図 11、図 12、表 1）

車中泊についてうかがいました。全体では 57%が避難中に車中泊を経験されています。日数は、65%が 3 日以内ですが、8%は 11 日以上の長期です。

図 11 で被災状況別に車中泊をみますと、「した」という回答は「被害大」で 69%、「被害小」でも 46%です。図 12 で被災状況別に車中泊日数をみますと、「被害大」では 11 日以上の長期避難が 16%に及んでいます。

表 1 は、避難所と車中泊の避難状況をまとめたものです。避難所避難と車中泊を併用したケースが、どの被害層でも 6～8 割います。

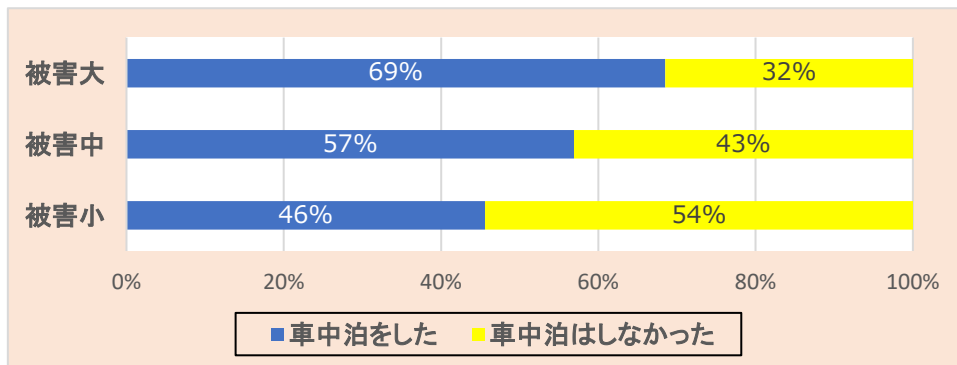


図 11 被災状況と車中泊避難

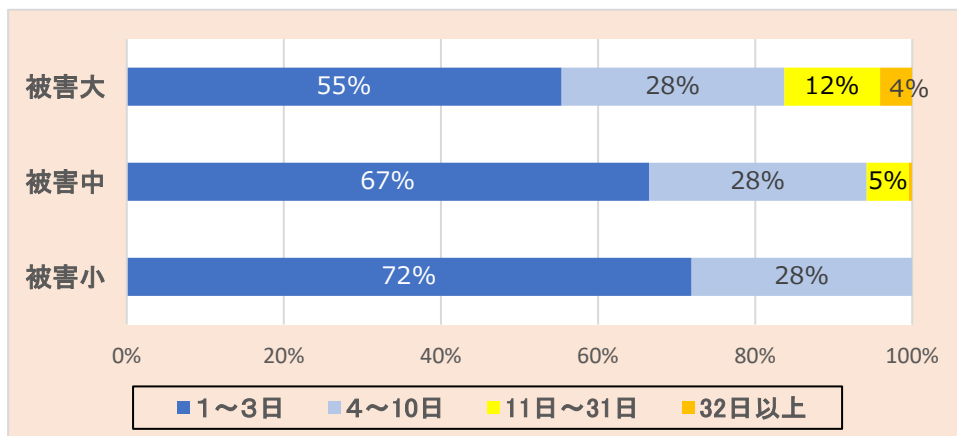


図 12 被災状況と車中泊日数

表 1 被災状況別にみた避難所避難と車中泊避難

	避難所等への避難	避難中の車中泊		合計実数
		した	しなかった	
被害大	した	75%	25%	63
	しなかった	60%	40%	45
被害中	した	64%	36%	207
	しなかった	49%	51%	192
被害小	した	80%	21%	44
	しなかった	26%	74%	80

◎質問：「あなたが車中泊による避難をされた理由をお聞かせください。」（複数回答：図13）

車中泊避難をした理由をうかがいました。8割の方が「自宅にいるのが怖かった」を挙げています。被害状況との関係でみると、「被害中・小」に多いのが「幼児や障害をもつ家族」、「被害大」に多いのが「混雑・プライバシー」と「ペット」です。

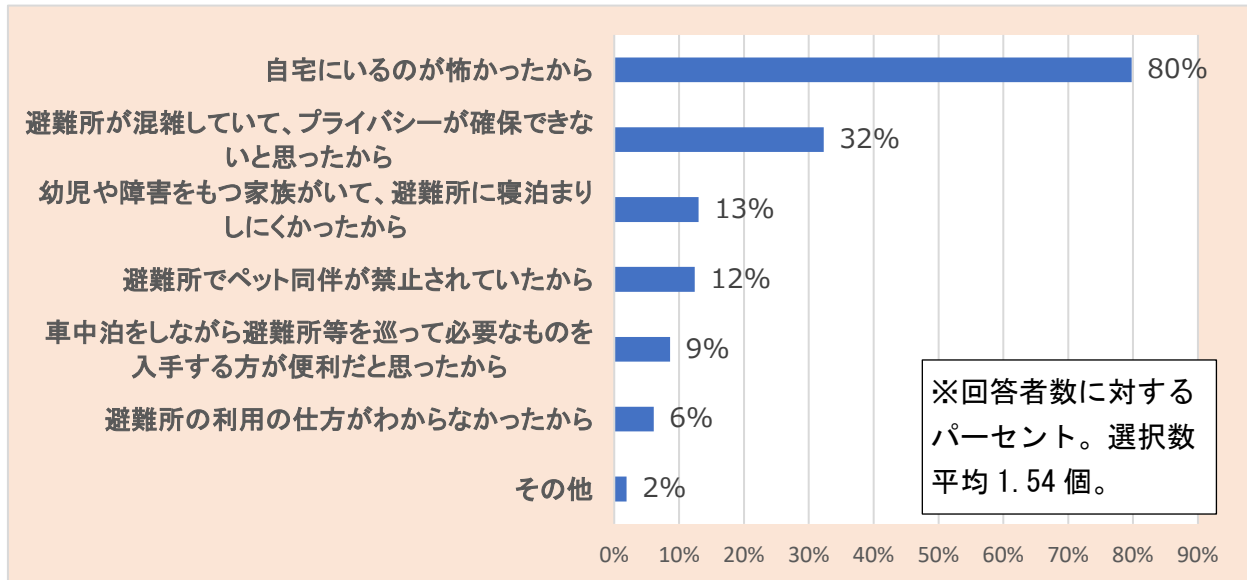


図13 車中泊の理由

◎質問：「被災直後に、あなたはどのような手段で必要な情報を得ましたか。」（複数回答：図14）

被災直後の情報収集手段をうかがいました。SNS やインターネットによる交信、検索が多様に利用されていますが、会話による情報交換（「近所の人」には「職場の人」も含めています）も37%あり、やはりロコミも重要なようです。

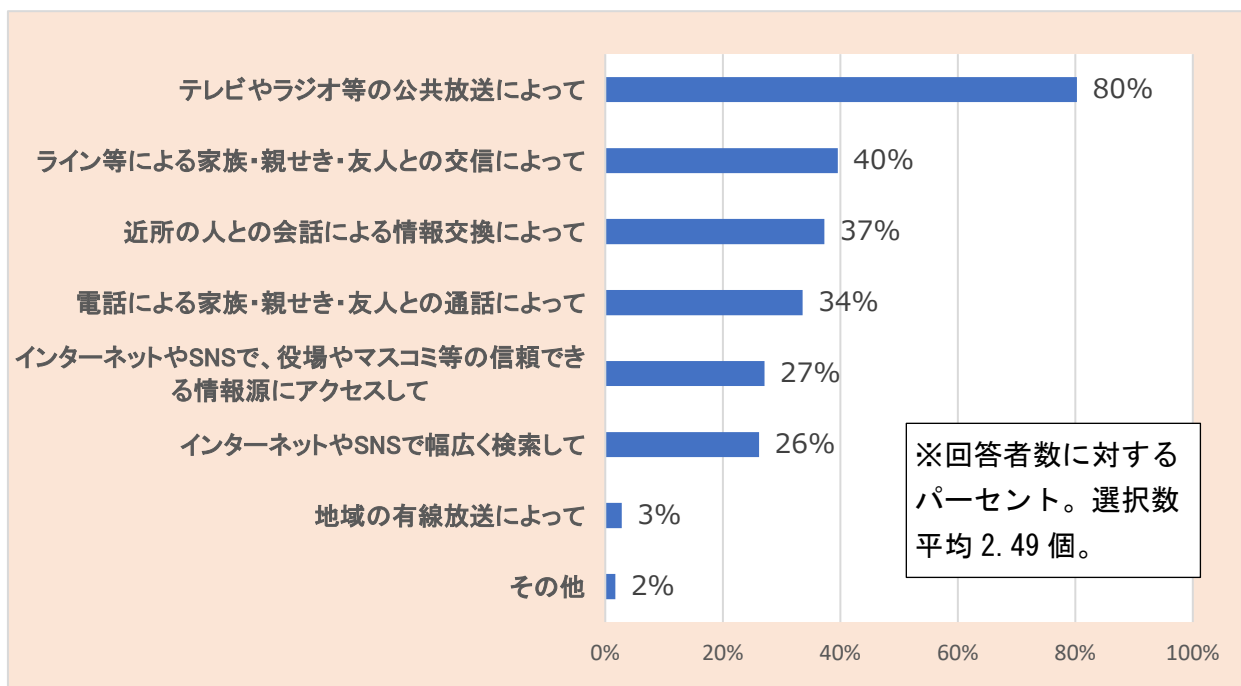


図14 被災直後の情報収集

◎質問：「あなたは、被災時や避難所生活の中で、以下のようなことで家族以外の人の手助けをされましたか。」（複数回答：図 15）

被災時に行った手助けについてうかがいました。選択された項目数で見ますと、平均 1.7 項目の手助けが行われています。被害状況別で見ますと、「被害小」の選択率がやや少ない項目がいくつかあります。「物資」と「情報」は「被害中」で、また「炊き出し」は「被害大」でやや多いです。しかしながら、それらもさほど大きな差ではありませんので、むしろ被害に関係なく支援がなされています。

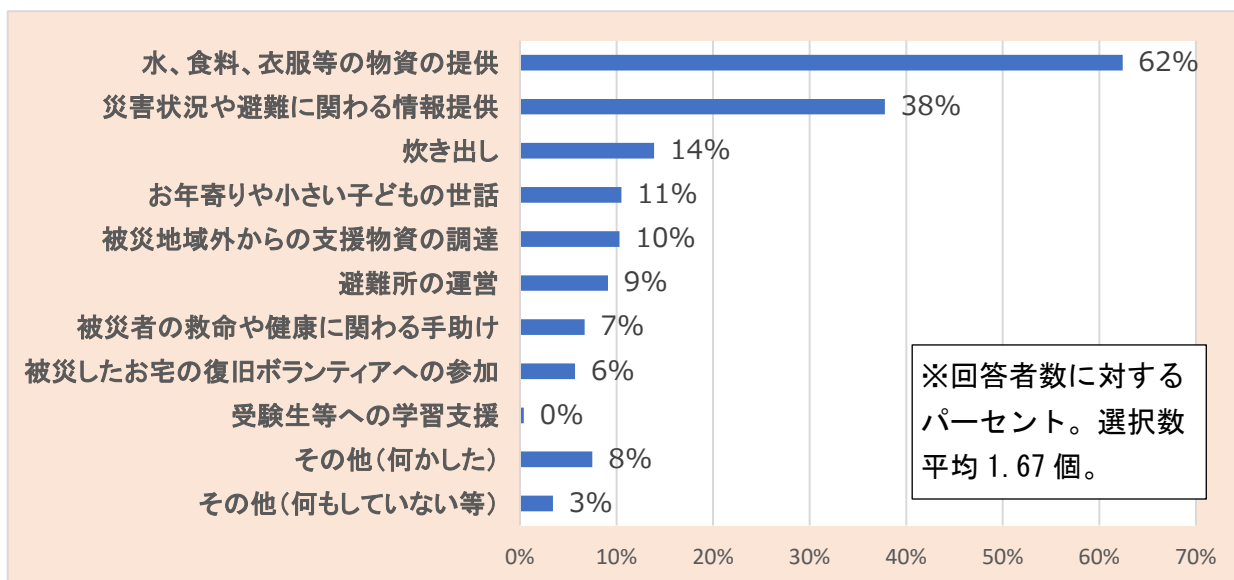


図 15 被災時の手助け

●Ⅲ まちづくりのこと =====

◎クロスロードについて

『クロスロード』という防災教育カードゲームがあります。震災のさまざまな体験にもとづいて、YES か NO かの分かれ道を問いにしたものです。それらは必ずしも正解のある問いではありません。皆が回答を持ち寄って、答えるときに悩んだことや考えたことを話し合うことが目的です。（ゲームとしては YES か NO の多い方が勝ちとなって、何問かで優勝者を決めます。）今回は調査の形です。皆でワイワイとはいきませんが、調査票の中に 2 つのクロスロード形式の問いをおきました。その回答の集計結果をお示しすることで、ご自分のお考えと市民の皆さんのお考えを比較する機会になればと思います。

※2016 年熊本地震の体験にもとづく『クロスロード熊本編』（くまもとクロスロード研究会, 2020）が作成されています。今回の 2 問はこの熊本編には入っていませんが、この熊本編作成プロジェクトの一環として作問したものです。

◎クロスロード避難者編の質問：「仮に、あなたが以下の状況にあった場合に、自分なら申し出をするかどうかをお考えいただき、直感的で結構ですので、「はい」か「いいえ」でお答えください。」（図 16）

・あなたは、大きな災害にあって地域の避難所に避難した市民です。

- ・避難所は地域の役員さんたちが仕切っていますが、大変そうです。自分も仕事の経験を生かして力になれるのですが、日頃自治会に参加していないので、入っていきにくい雰囲気です。避難で疲れている様子の家族も気になります。
- ・あなたは、協力を申し出ますか。

この問いの回答は、「はい」が「いいえ」を大きく上回りました。しかしながら、もし「わからない」という人が「いいえ」に流れると、半々に近くなります。なぜこんなに答えに迷う人が多いのでしょうか。その理由を考えながら、ぜひ近くの方々に、この場面で「協力」を後押しする事柄や逆に押しとどめる事柄について話し合ってみてください。

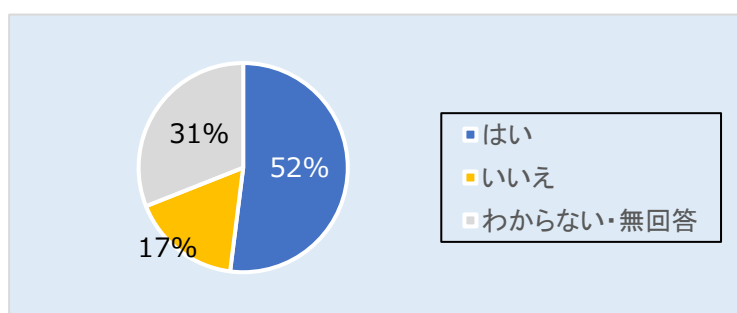


図 16 クロスロード避難者編

◎クロスロード運営者編の質問：「同じく仮に、あなたが以下の状況にあった場合に、自分なら申し出を受け入れるかどうかをお考えいただき、直感的で結構ですので、「はい」か「いいえ」でお答えください。」(図 17)

- ・あなたは、避難所の運営責任をもつ地域リーダーです。
- ・大きな災害が起きて避難所を開設しましたが、日頃から一緒に地域運営を行っている仲間はずれかしかいません。避難者からボランティアを募って何とか自分たちで運営をと考えていたところ、ある支援団体から運営スタッフ派遣の申し出がありました。
- ・あなたは、支援団体の申し出を受け入れますか。

この問いの回答は、「はい」が「いいえ」を大きく上回りました。「わからない」という回答も18%ありますが、先ほどの質問よりは少なめです。運営者も被災者なのだから楽ができるならその方がよいのですが、専門的支援が入ることで避難者が「お客様」状態になってしまうのも心配です。この質問についてもぜひ、行政を含めた外部支援に依存することの一長一短について話し合ってみてください。

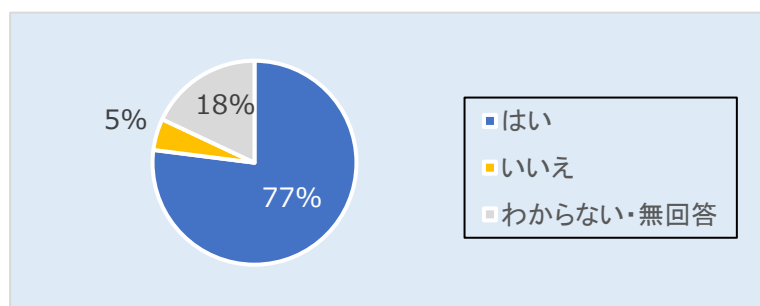


図 17 クロスロード運営者編

◎質問：「地域で防災・減災まちづくりの取り組みを進める際に、あなたは、どのような条件があれば参加・協力しやすいと思いますか。（複数回答：図 18-1、もっとも重要なもの：図 18-2）」

こういう条件があればまちづくりの取り組みへに参加・協力しやすくなる、という条件をご提案いただきました。上位2つ、「自宅や職場の近くで参加できる」と「時間の自由（自己裁量）がきく」は回答者の6割が選択されています。「一緒に参加する仲間がいる」がそれに続きます。

そのうちもっとも重要なものを1つ、選んでもらいました。項目順位は全体に大きく違いませんが、トップは「時間の自由（自己裁量）がきく」です。

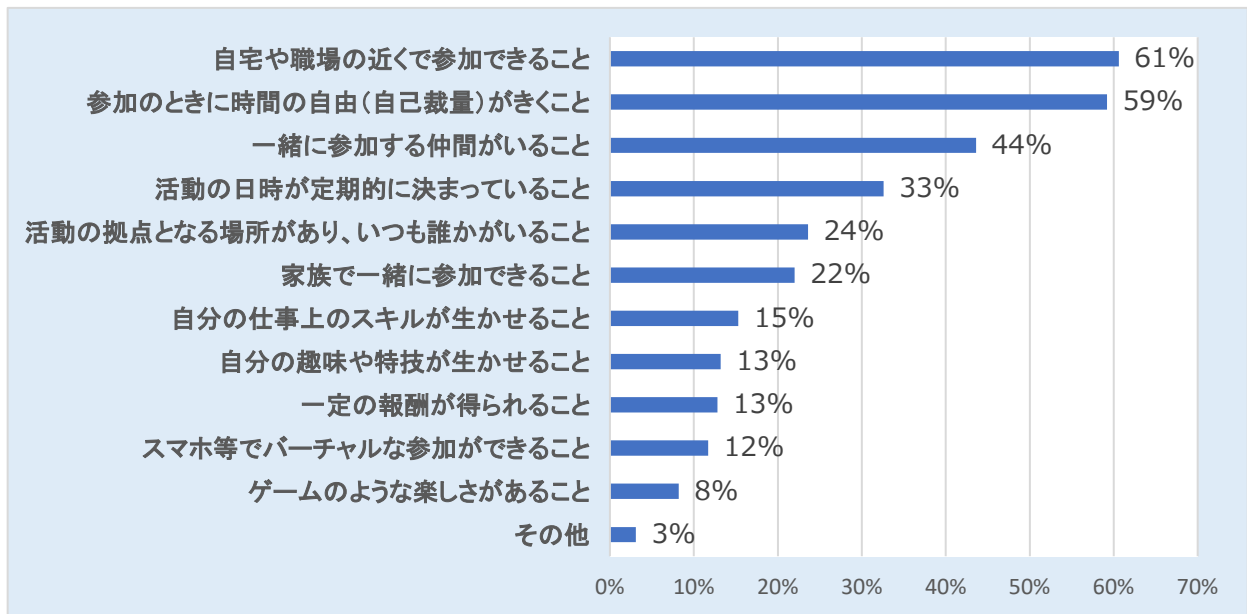


図 18-1 参加・協力を促す条件

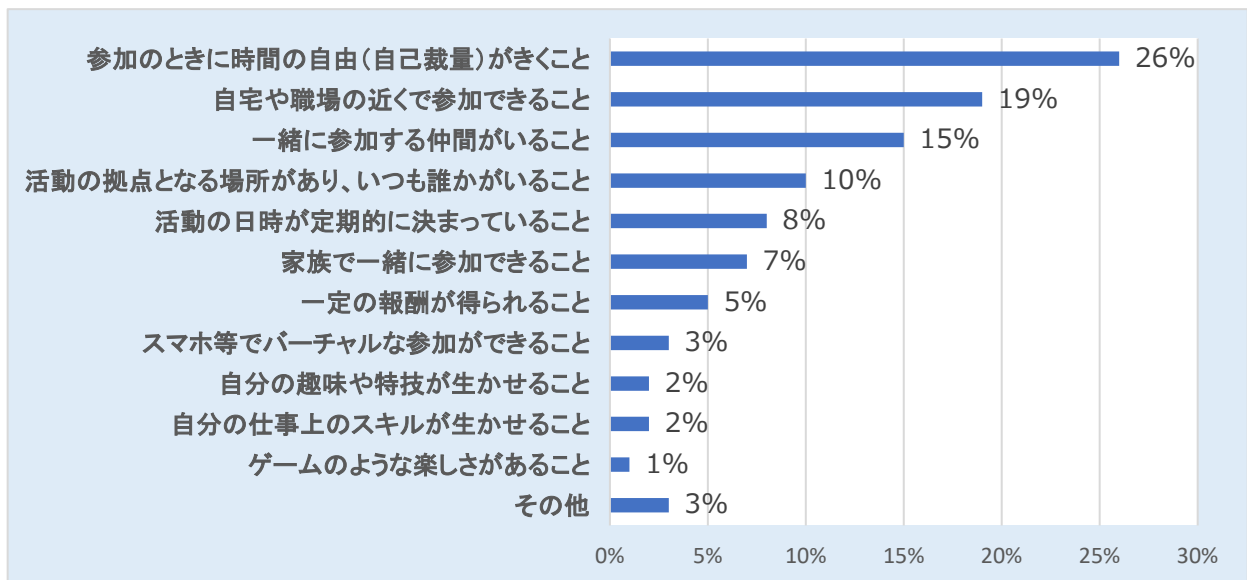


図 18-2 参加・協力を促す条件 もっとも重要なもの

◎質問：「熊本市が政策的にまちづくりの取り組みを進める際に、あなたは下記のどれが重要だと思いますか。（もっとも重要だと思うもの1つ）」

◎質問：「それでは、あなたが参加してみたいと思うまちづくりの取り組みは、下記の中にありますか。（もっとも参加してみたいと思うもの1つ）」（図 19）

熊本市における政策的に重要なまちづくりの取り組みと、参加してみたいと思うまちづくりの取り組みをうかがいました。政策的に重要なまちづくりのトップは「地域の防災や安全」で、これは参加してみたいもののトップでもあります。同様に「地域の子どもたちの保育・教育」は重要度も参加意欲も2位です。

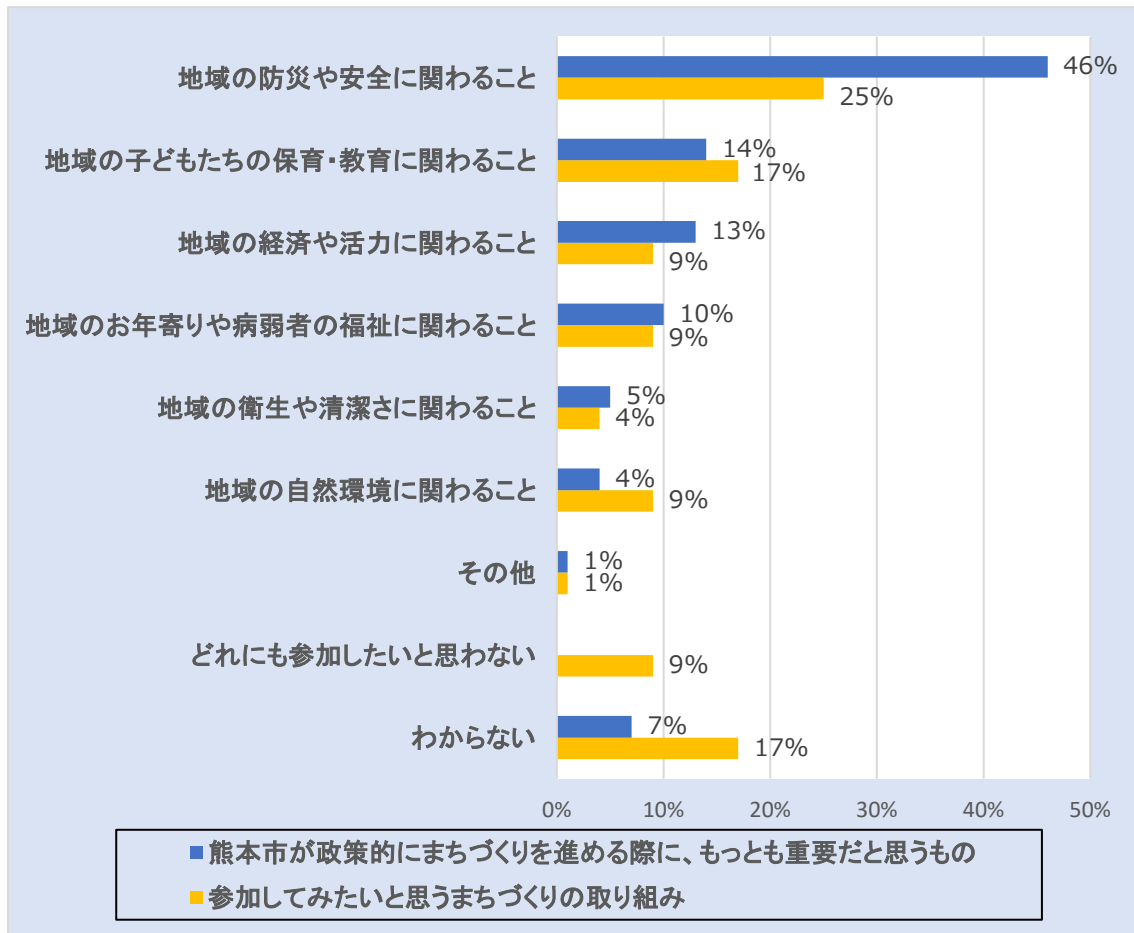


図 19 政策的に重要なまちづくり、参加してみたいまちづくり

●IV コロナ禍のこと =====

今回の調査では感染症も災害の一種として、2016 熊本地震とともに、コロナ禍での生活のご様子についていくつかうかがいました。

◎質問：「2020 年からのコロナ禍によって、以下にあげたことについて、変化はありましたか。」(図 20)

コロナ禍による社会的交流や活動の変化についてうかがいました。程度を問わず減ったか増えたかで見ますと、社会関係の希薄化の方向では、「一人で過ごす時間」が「増えた」が 87%、「親しい友人との会話や交流」が「減った」が 82%と格段に高い数値です。「減った」割合は、「職場や仕事を通じたつきあい」と「趣味やスポーツ等の活動」も 6 割を超えます。一方、活発化する方向で「増えた」がやや多いのは、「家族の団らんや交流」11%と「感染症予防・防災の活動への参加」9%です。

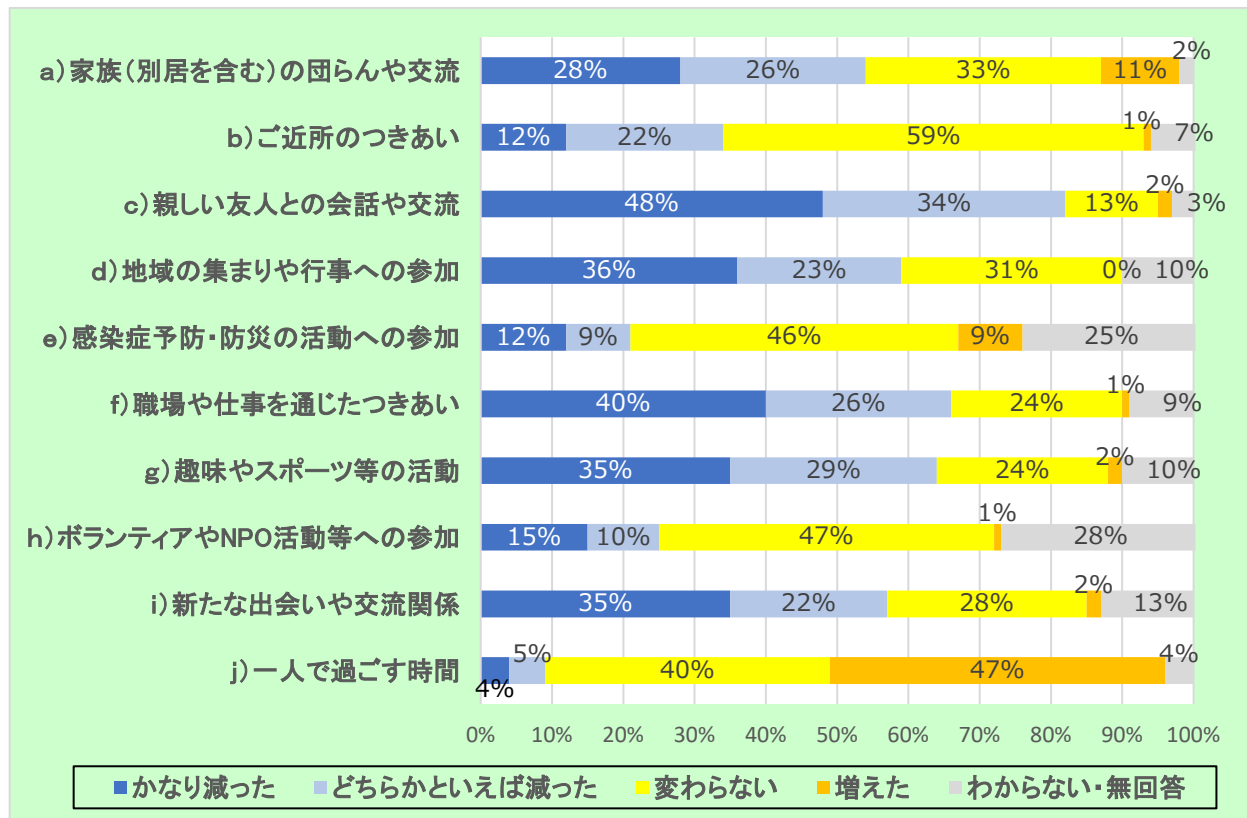


図 20 コロナ禍による交流や活動の変化

◎質問:「コロナ禍でオンライン化が進んでいますが、以下にあげることは、あなたに当てはまりますか。」(図 21)

生活や仕事のオンライン化についてうかがいました。日頃会えない人との親交の深まりや仕事のやりやすさでプラスの影響もあるようですが、それが「当てはまる」比率は10%前後です。オンライン化にともなうコミュニケーションの難しさについては「当てはまる」という回答が20%前後あります。

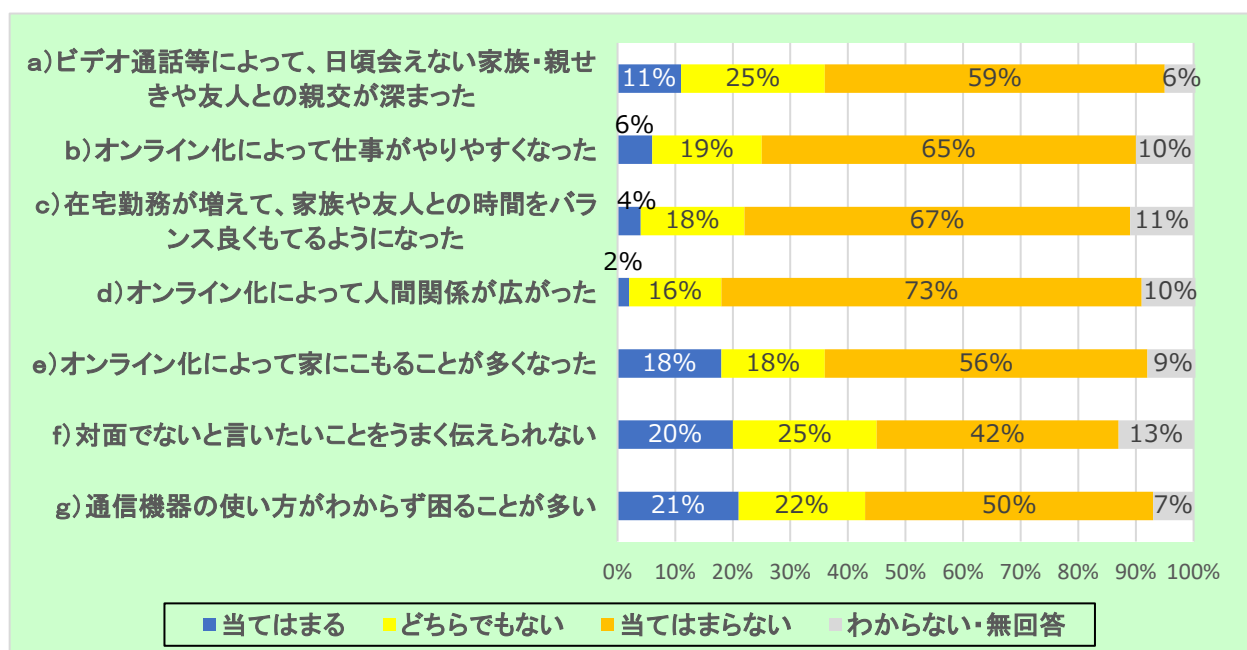


図 21 オンライン化の影響

◎質問：「あなたは、コロナ禍の状況で孤独感や孤立感を感じることがありますか。」（図 22）

コロナ禍のもとでの孤独感についてうかがいました。程度を問わず「感じる」という回答が27%あります。

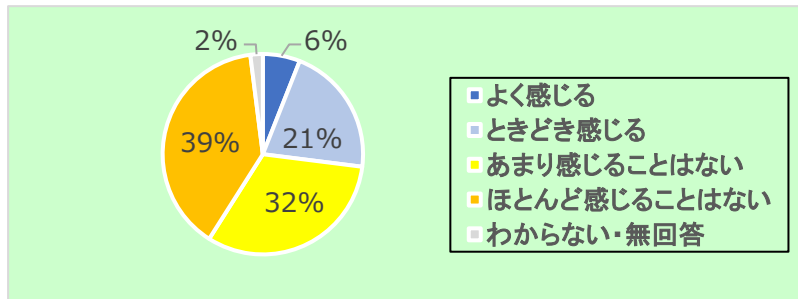


図 22 コロナ禍による孤独感

◎質問：「コロナ禍の影響で、あなたの働き方は変わりましたか。」（複数回答：図 23-1、図 23-2）

コロナ禍による働き方の変化についてうかがいました。「仕事や業務の内容が変わった」13%をはじめ、5%未満の比率ではありますが、さまざまな変化が報告されています。これらの「変化あり」（ただし「在宅勤務化」を除く）をひとまとめにして、前述の「孤独感」との関連をみたのが図 23-2 です。これから、働き方の変化と孤独感に一定の関連があることがわかります。

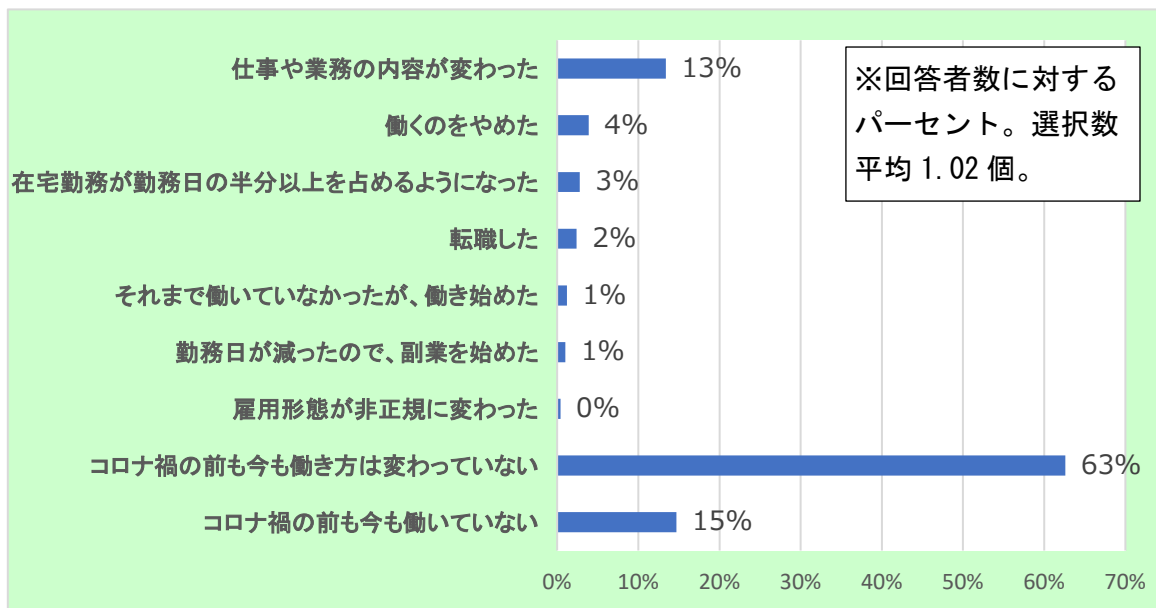


図 23-1 コロナ禍による働き方の変化

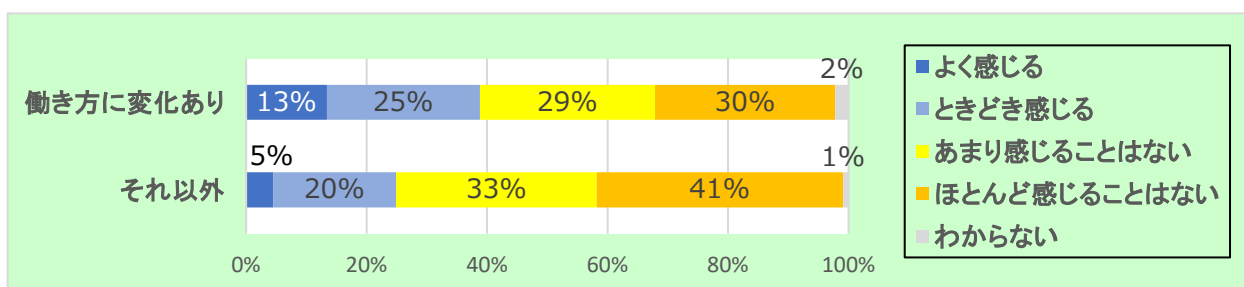


図 23-2 コロナ禍による働き方の変化と孤独感

◎コロナ禍は、あなたのお宅のここ1年間の年収にどのように影響しましたか。(図24)

コロナ禍にともなう収入状況の変化をうかがいました。「増えた」人もわずかながらおられますが、それを含めて7割強が変化なしです。一方、「減った」は19%を占めます。

グラフには示しませんが、どの程度「減った」かの割合は平均26%です。50%以上「減った」方も8%おられます。

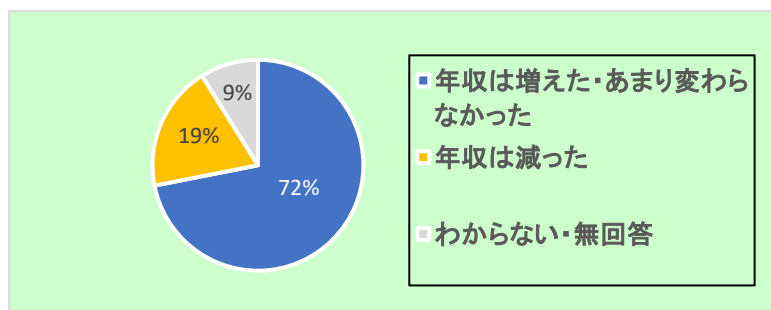


図24 コロナ禍による収入の変化